

# 授業における『白樺』の美術的要素について

西村 修子\*・福田 隆眞

Artistic Element of a Magazine *Shirakaba* Perceived by Students of Junior College of Art

NISHIMURA Shuko\*, FUKUDA Takamasa

(Received December 7, 2009)

キーワード 『白樺』、西洋美術、絵画

## はじめに

文芸雑誌『白樺』は、明治43年に創刊され、大正12年の関東大震災まで13年5カ月間に全160冊を刊行した。西洋美術を積極的に採り入れた『白樺』は、美術雑誌としても通用するほどの熱意をもって美術作品の掲載に努めたのである。

本稿では、『白樺』の美術的要素に注目し、『白樺』の同人たちが採り入れた西洋美術の数々を、芸術短期大学の学生に提示することにより、『白樺』がどのように理解され、美術認識を深めるために役立つか、また『白樺』が紹介したさまざまな美術作品が現代の美術教育にどのように受容されるかを検討するものである。

## 1. 対象 山口芸術短期大学の学生 1年後期

山口芸術短期大学の1年生、40人を対象に『白樺』の美術的要素に関する授業を実施し、明治末期から大正にかけて刊行された『白樺』が、現代の若者たちにどのように受容されるかを確認する。

授業では、『白樺』の内容のほぼ半分が美術に関する記事であることを知らせたうえで、『白樺』復刻版のコピーを見せ、認識させる。『白樺』の挿絵や白樺展覧会、『白樺』の同人たちが支持した西洋美術の図版に関する説明を行い、学生たちの意見、感想を求めた。

学生たちは、100年近く前の文芸雑誌が、美術に関して非常な情熱を傾注していることに驚嘆した様子であった。

## 2. 学生の意見、感想

### 2-1 『白樺』の西洋美術が、美術史を無視して導入されていることに関して

・不自然と言われれば不自然だが、当時の読者はこだわらずに鑑賞していたのではないか

---

\* 山口大学大学院東アジア研究科

と思う。

- ・美術専攻としての教科書ならば問題があるが、万人のための読み物なのだから、好きな見方があって良いと思う。
- ・『白樺』の編集者たちの気持ちが伝わってきて、昔の雑誌とは思えない。
- ・当時は、どのような作品が世の中に受け入れられていたのか、勉強になる。
- ・美術史を考慮して採り込むと時間がかかり、熱い気持ちが冷めると思う。
- ・個人的には否定しない。美術史を考えていると絵に対する第一印象が希薄なものになってしまうと思うからです。しかし本当に絵画を楽しむのであれば時代背景や美術の歴史を理解した方が、さらに深く自由に美術を楽しめると思う。
- ・当時の同人誌が海外の美術を採り入れること自体がすごいと思う。

## 2-2 『白樺』の美術評論について

- ・当時の外国の美術事情が伝わってくる。
- ・美術評論は文学者の感動が多く、美術の専門家からみてもっと絵画作品そのものを批評するのではなかろうか。
- ・作品よりも、たとえばゴッホやロダンは偉大な人だというように、画家個人に対する評論が目立つ。
- ・西洋の美術批評を翻訳をした文章も読みごたえがあり、生々しい感じ。
- ・よく知らない日本人画家たちが、パリに留学して帰国し、日本の美術界に貢献したなど勉強になった。
- ・『白樺』の文学者だけが、特別に西洋美術を紹介したのだろうか。他の雑誌も見たい。
- ・当時は油絵そのものが珍しかったこともあって、『白樺』は雑誌の中でも一番新しい読み物として受け入れられていたのだろうか。
- ・今の日本人は、自国の美術よりも西洋美術しか知らないことが多いので、もっと深く広く勉強すべきだと考え、少し反省している。

## 2-3 挿絵について

- ・丁寧な仕上がりだと思う。
- ・図版が傷まないように、大事に装丁されており、雑誌というよりも画集のようだ。
- ・カラー印刷が掲載されるとよかった。
- ・挿絵についての解説や評論が為されており、勉強しやすい挿絵だと思った。
- ・『白樺』のことは知らなかったが、日本に印象派を知らしめたということなので、自分で図書館などで詳しく調べてみたい。

上記は積極的な意見、感想であるが、この他に、「昔の文字が読みづらいが、当時の雰囲気は伝わってくる」「インテリゲンチアなのに、風変りな同人たちだと思った」など、別の側面からの感想もあった。

## 3. 『白樺』や白樺美術展覧会に紹介された画家たちの作品について

本章では芸術系短期大学1年の学生に、『白樺』の挿絵や白樺美術展覧会で紹介された作品を提示し、意見を求めたものの一部を掲載した。その際、単なる個人的な感想に留ま

ることなく、『白樺』の同人たちの意図と時代背景、作品の主題や造形要素に関する考察が為されるように、あらかじめ各作品と『白樺』の関係を簡略に説明しておいた。

以下は芸術短期大学生の作品に対する意見、感想である。



アルブレヒト・デューラー、「正義」、1498、  
エングレーヴィング

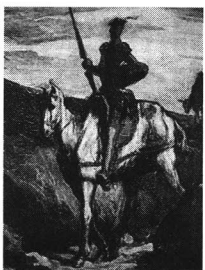
「正義」という題名だが、人物の表情がちょっと落ち込んだように見える。デューラーの作品が『白樺』に掲載されるようになったのは、岸田劉生が武者小路実篤に勧めたためだと知り、デューラーファンの私は、岸田と武者小路も気になり始めた。銅板画のせいかな、少しうつろな感じがする。ライオンの顔も恐くて、正義の別の側面が表わされているみたいだ。(学生A)



ピーテル・パウル・ルーベンス、「マリー・ド・メディシスの生涯」、19世紀初頭、

ルーベンスは恵まれた一生を送った人だが、絵画の題材もバロックらしく豪華な感じ。『白樺』が挿絵として掲載したものであるということで、『白樺』同人の趣味なのか、広く読者のためなのか、多種多様な様式の美術を採り入れていると思った。

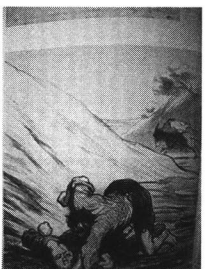
(学生B)



オノレ・ドーミエ、「山中のドン・キホーテ」、1850

『白樺』が紹介した絵画作品には文学的な主題が多いと思った。

ドン・キホーテの滑稽さを笑うよりも、夢想到走る男の自己中心的な一途な意志に共感しているのかもしれない。(学生C)



オノレ・ドーミエ、「ロバと二人の盗賊」、1862

後ろのロバが遠近感を出している。

二人の盗賊が仲たがいをしているうちに、第三者が漁夫の利を得たという図だろうか。ドーミエの文学性のある版画作品も文芸雑誌『白樺』にマッチしたように思う。

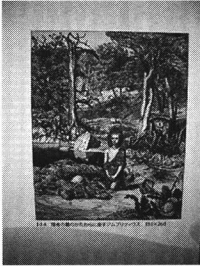
(学生D)



ギュスターヴ・クールベ、「嵐の海」、  
1865

波が嵐によって激しく波立っている。背景の様子からも嵐だとわかりやすい。クールベは絶対的リアリズム以外の何物でもないと思っているのだが、黒田清輝のような「外光派」でもあるということから、印象派と外光派はやはり違うのだと思った。

(学生E)



マックス・クリンガー、「間奏曲」、1881

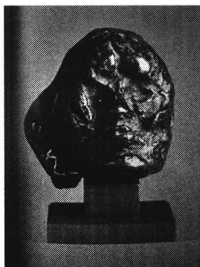
『白樺』の武者小路や志賀直哉は、初めはドイツの画家に夢中だったと聞いた。マックス・クリンガーの版画は、意味ありげで、作品中央の人物が何を訴えているのに興味があった。

クリンガーの著作を翻訳して『白樺』に掲載したり、クリンガーと手紙のやりとりをしている『白樺』は、当時の同人誌の中でも目立ただろうと思った。(学生F)



オーギュスト・ロダン、「ロダン夫人」、  
1890

『白樺』が送った浮世絵の返礼だという。当時も今も巨匠であるロダンが、日本の同人誌に自分の作品を送ってきたのである。小品だが、すごいと思った。(学生G)



オーギュスト・ロダン、「ゴロツキの首」、  
1890

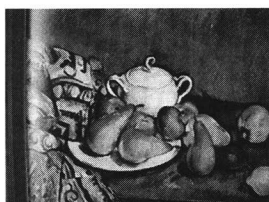
ロダンからの贈り物の内のひとつである。ゴロツキのイメージと、人相の悪い表情が出ていると思う。

現在、大原美術館が所有しているとのことなので、行って実物を見ようと思っている。(学生H)



オーギュスト・ロダン、「或る小さき影」、  
1890

『白樺』に送ってきたロダンの作品3点の内のひとつ。全身像なので他の2点よりロダンの主張がよく伝わってくる。(学生I)



ポール・セザンヌ、「砂糖壺・梨とテーブルクロス」、1893

セザンヌの絵はとても素敵だと思う。ただ置いてある果物でも、やわらかい感じやあたたかい感じがあると思う。

明るい色を使っているのに静かすぎるぐらいだが、寂しさを感じさせない。じーっと見つめてしまうような絵だ。(学生J)



エドヴァルト・ムンク、「二人の人物—孤独な人たち」、1895

版画作品だが、ムンクはいつも意味ありげで、暗く孤独なテーマを取り上げている。手法よりも、作品の内容やテーマが気になる。(学生K)



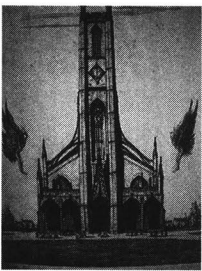
アンリ・ド・トゥールーズ＝ロートレック、「彼女たち」、1896

労働する女の姿がリトグラフで制作されている。バックに日本の扇子が描かれている。ロートレックも日本の浮世絵に影響されていると思った。(学生L)



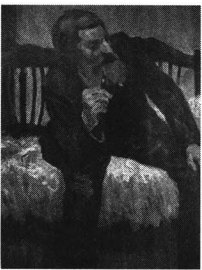
オーブリー・ビアズリー、  
「オスカー・ワイルド（サロメ）の挿図の  
ための素描集」、1907  
ライン・ブロック印刷

どろどろした血生ぐさい感じに迫力がある。こわいけれど血の流れる表現が好きです。素描というよりイラストレーションの特徴があり、自分も特殊なイラストを描いてみたいと思った。(学生M)



バーナード・リーチ、「ゴシックの精神」、  
1907

暗い印象を受けた。黒い羽根の生えた生物が両端にいて、「死」の印象が強いと思った。エッチングらしく細かいところまで丁寧に作られていて、教会をメインに描いていて、ゴシックの精神が伝わってくる感じがしました。(学生N)



有島生馬、「パイプを吸う男」、1908

有島武郎の弟で、パリに留学して帰国した時の記念展覧会の作品だという。画面からヨーロッパの匂いがする。まるで外国人画家が描いた作品のようだ。  
(学生O)



山脇信徳、「雨の夕」、1908

奥の建物がきれいな青で西洋的で、全体的に印象派の手法で雨にぬれた道路を表現している。  
この絵は完全に印象派に影響されていると思う。(学生P)



アンリ・ルソー、「要塞の眺め」、1909

精巧だけど写実的ではない。平面的な印象。画面が暗く少し気味が悪い。要塞というテーマがこの空気をつくっているのだろうか。(学生Q)



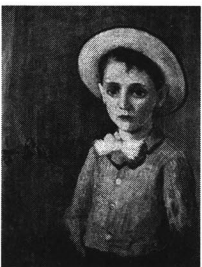
有島生馬、「黒衣の女」、1909

やさしそうな顔立ちだけど、どこか寂しげな表情に見えると思った。淡いタッチでも陰影がわかりやすいので奥行きが感じられる。作者の有島生馬が有島武郎の弟で画家だとは知らなかったし、まだ下の弟に里見弴という人がいて、皆『白樺』同人だとは驚いた。(学生R)



有島生馬、「舞台衣装」、1909

初めて見た絵だが、第一印象は色彩がとてもきれいだということだった。また絵全体に奥行きが感じら、フランスに留学した人らしい絵になっている。背景のカーテンや額縁の直線が女性の曲線の美しさを際立たせている。洋服には質感や重みを感じられ、洋服とカーテンが補色関係にあるが強すぎず、落ち着いた感じがする。(学生S)



南薫造、「小童」、1909

背景が暗く、人物の表情も暗く見え、悲しい感じがする。また冷たい感じがする。ピカソが息子を描いた絵と共通するものがあるが、この絵はひ弱で物悲しい。画面の左側を開けて少年が何かを凝視している様子がわかる。(学生T)



南薫造、「春」、1909

端正できれいな印象。落ち着いた感じがする。背景の青系と女性の服の赤系のコントラストと花の配置がおもしろい。背景の青系で女性の肌がより美しく見えると思った。女性が左寄りの構図なので、女性が少し遠くを見ているように感じる。ヨーロッパ帰りの展覧会にふさわしい絵だと思った。(学生U)



オーギュスト・ルノワール、「ばらをつけた女」、1911

ルノワールの絵はよく見かけるので、画風には慣れている。『白樺』は後期印象派の画家としてセザンヌやルノワールにも傾倒していたし、『白樺』は日本中にヨーロッパの絵画を普及させたのだと思った。(学生V)



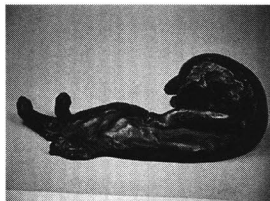
湯浅一郎、「西日」、1911

人物の表情や、着物の模様や明暗がよく描かれている。夏の季節がよく伝わってくる。赤系の色をよく使っているが、さみしそうな表情に見える。日本の印象派みたい。(学生W)



橋本邦助、「フランスの秋」、1911

とても穏やかで静か。それでいてお洒落な感じ。秋だから少し淋しいといった感じにもとれる。光が反射した水面が穏やかでとてもきれい。白樺派の画家はみんなパリの印象派に影響されているようだ。(学生X)



戸張弧雁、「猫」、1911

ロダンでもなく、高村光太郎でもなく、戸張弧雁特有の彫刻作品だと思った。堅いブロンズで猫のしなやかさや柔らかい毛や、猫の性格的なものまで表現している。(学生Y)





梅原龍三郎、「横臥裸婦」、1912

画面全体が明るい色調で描かれているのに対して、人物の影には黒が使われて、肌のハイライトは白が使われているのが魅力的である。梅原龍三郎はルノワールに師事したということだが、タッチが印象派の点描に近いようだ。(学生Z)



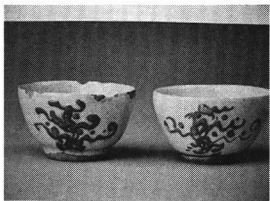
木村荘八、「祖母と子猫」、1912

輪郭線がはっきりしていて、クロワゾニズムみたい。  
木村荘八はゴーギャンに影響されていたのではなかろうか。(学生a)



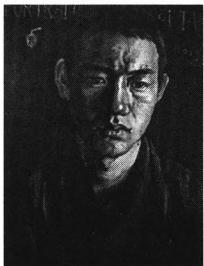
高村光太郎、「静物 (洋酒瓶)」、1913

高村光太郎は彫刻家であり、詩人であって、あまり絵画を見たことはない。  
彫刻家らしく、立体を意識した作品だと思った。(学生b)



バーナード・リーチ、「生命の木のモチーフのある湯呑み」、1913

作者は英国人で、エッチングを教えに日本に来たという。日本文化のファンだと聞くと、日本人としてはやっぱりうれしい。岸田劉生にエッチングを教え、日本の陶芸に関心をもって陶芸作品をたくさん作った。この作品の絵付けは『白樺』の表紙にも使われている。(学生c)



岸田劉生、「高須光治君之肖像」、1915

油絵で描かれた人物像が、精密な描写で明るい光の具合がとてもきれいです。デューラーを意識して描かれたということだけれど、自分もこれぐらいに描けるといいなと思った。(学生d)



岸田劉生、「静物（湯呑と茶碗と林檎三つ）」、1917

硬い質感と、俯瞰したアングルが空間を冷たく際立たせている。

岸田劉生の個展の作品で、右下の茶碗はバーナード・リーチの陶芸作品だそうで、『白樺』の人たちの繋がりを見たように思う。(学生 e)



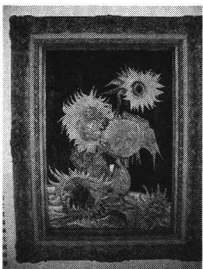
岸田劉生、「初夏の小路」、1917

緑の色でも、様々な色が使われていて、茂っている様子とか、暗くなっている様子がとても伝わってくる。道に影が入っているのも、本当にリアルで写真見たい。木の枝も緑の暗い部分と一体化しそうなのに、ちゃんと枝って感じが分かってすごいと思う。(学生 f)



高村光太郎、「手」、1918

高村光太郎は『スバル』の同人だが、『白樺』に積極的に参加した人だそうだ。抜きん出た描写力には、私だけではなく、誰もが圧倒されるだろう。ブロンズを制作したことがまだないのだが、この作品の模刻を試みたい。(学生 g)



ヴィンセント・ヴァン・ゴッホ、「向日葵」、1921

この絵が、日本の実業家が日本に初めてもたらした本物のゴッホ作品だということだった。昔の日本人もお金持ちが美術品を買いたがるのだと思ったが、『白樺』の同人が金持ちで育ちが良いので、裕福な関係者とも知り合えるのかもしれない。ゴッホらしいゴッホの向日葵だと思う。でも戦争で焼けたと聞いてショックだった。

(学生 h)



山本願彌太（左）と武者小路実篤

[注]

前掲は複製画であるが、この写真は「向日葵」の実物と、購入者の山本願彌太と『白樺』の武者小路実篤である。かなり大きい作品だとわかる。



アンリ・マティス、「待つ」、1921

『白樺』の人たちは抽象画や未来派やキュビズム等の、美術の改革にはあまり気乗りがしなかったという。しかしマティスの絵画ならわかる、と『白樺』の同人は言っている。たしかに、この作品はマティスとしてはわかりやすい。(学生 i)

## まとめ

『白樺』が刊行された時代背景には、大逆事件や第一次世界大戦、台湾での抗日運動など多くの事件があったが、『白樺』は大正デモクラシーの自由な風潮を担うように、個性の尊重と自己を大切にす信念を貫き通したのである。

『白樺』が紹介した美術作品の意図を探究することによって、学生たちは作品の造形要素や視覚言語による見方を深めることができ、作者や時代背景を知ろうとする見方を獲得したようである。『白樺』の美術は、テーマを読み取るための洞察力を高める一助になったと考えられる。なぜなら、深い洞察力と人間の探究こそが『白樺』の同人たちの真の目的であったからである。

## おわりに

『白樺』が紹介した美術作品は、現代の若者たちにとっても新鮮な参考資料となったようである。様々な意見、感想を提供してくれた芸術短期大学の学生たちは、子どもの頃から西洋美術を中心に美術に親しんでおり、日本よりも西洋の美術家に対する憧憬の念が大きかったと考えられる。今回、学生たちは、日本の画家たちが模索した画業を再認識することができ、日本に積極的に西洋美術を採り入れた『白樺』の業績に関心を持ち得たことの意義は大きい。明治末期から大正にかけての日本人が美術に傾倒してきた経緯と動向に、時を経た現代の若者たちが受けた刺激を、今後の美術活動に活用し、展開していくことが望まれる。

## 参考文献

『白樺』復刻版，岩波ブックサービス，2004.

「白樺派の愛した美術」，京都文化博物館，宇都宮美術館，財団法人ひろしま美術館，神奈川県立近代美術館，読売新聞大阪本社文化事業部，平成21年.